

おなか小后

題字 菅井松雲
 毎日書道展審査会員 師
 小合書道教室講師
 発行者/
 小合地域コミュニティ協議会
 発行人/田村由美子
 編集/総務部

地域の人口動態
 平成29年7月末現在
 世帯数 1,226 戸
 男 1,848 名
 女 1,958 名
 人口 3,806 名



地域の力に支えられて

小合中学校校長 永井一哉

4月に赴任してから、慌ただしく毎日が過ぎていき、気がつくといかに5か月が経過しています。この間、地域の皆様からはいろいろな機会でご支援・ご協力をいただき、感謝しております。全校生徒82名の小さな学校ですが、私たちを支えてくださっている「地域の力」のおかげで順調に教育活動を進めることができていることを、改めてありがたく思っています。

新年度早々に行われた「愛さつ運動」では、大勢の皆様から登校する生徒への挨拶、声がけをいただきました。単なる朝の挨拶という意味だけでなく、生徒にとっては、これだけの地域の大人から見守られながら生活できているという安心感につながるものでした。5月に行われた「ふるさとふれあいウォーキング」では、大変多くの方から見守りや声がけをいただいただけでなく、励ましの声とともに生徒と一緒に歩いていただいたおかげで、安全に、また生徒全員が達成感をもって行事を終えることができました。

また、7月の加藤登紀子コンサート及び吉田千秋の遺品展示では、ボランティアとして生徒11名が参加させていただきました。地域貢献の一端を担う役割に取り組ませていただきました。これも、地域の方からのお声がけと当日を迎えるまでの準備のご支援があればこそできた取組であり、参加した生徒のみならず小合中の全校生徒

にとって、地域をより身近に感じ、地域への愛着・誇りをもつことにつながっています。

さらに、前庭の花壇の整備やバックネット裏のベゴニアの植え付けをはじめ、桜の木のアメシロ対策などの目立たない支援も含めて、環境整備へのお手伝い、ご協力をいただきました。おかげで、快適な環境の下で学校の諸活動を行うことができている。

このように、地域に支えられて現在の小合中があるわけですが、次期学習指導要領ではこのような地域連携にとどまらず、目指す生徒像を地域と共有しながら地域とともに生徒を育てていく「社会に開かれた教育課程」の編成・実施が求められています。

今年度は創立70周年という節目の年にあたります。今まで以上に地域の声に耳を傾け、地域との新たな連携・協働により、地域と一体となって生徒を育てていく新たなスタートの年とするべく、努力していきたいと思えます。今後ともよろしく願いいたします。

小合地区コミュニティセンター

日曜夜間の臨時休館について

平成29年7月から新潟市の指導により、日曜夜間の時間帯（午後6時から午後9時30分まで）の利用申込申請がない場合は、午後5時30分以降を臨時休館とさせていただきます。日曜夜間にコミセンを利用する場合は、利用予定日の前月10日までに小合コミセンへ利用の申請をお願いします。

小合地域懇談会から

地域の活性化の為に

平成19年4月新潟市は政令指定都市としてスタートした。

新しい町づくりがはじまった。協働による取り組みという。人口減少・単身世帯の増加・高齢化の進行。地域の環境は変化する。

安心・安全や子育て・福祉はどうするのか。ポイ捨て・地域が抱える課題はますます多様化複雑化している。地域が主体となりまちづくりを進めるためには市民一人一人が参画意識をさらに高め、市民自治の多様な担い手が協働して取り組むことが必要となる。

平成29年2月の11回目の地域懇談会は市民協働課の出前講座と「ワークショップ」方式を実行。ワークショップ方式は互いに双方向で話し合うことです。議論沸騰新しい考えも生まれる。賛成・反対、或いは足して二で割るガラガラポンではなくまったく新しいものが生まれる可能性はある。今回テーマ毎に実態と要望が出

された。次はこの実績の上で一年に一回の地域懇談会であるが、意見から活性化につながる考えがさらに練られて、環境も整い具体化に向けた活動のため何をすべきか、識者の興論の場とする。

テーマは四つ

- ① 地域社会の安全・安心
- ② 少子高齢社会の生き方
- ③ 「コミ協」と自治会・町内会の在り方
- ④ 地域の産業振興



市、協働課より出前講座を受ける

「花の小合」に思う

今、コミセンの花壇は、春に植えたサルビア・マリーゴールド・ペゴニア・ペチュニア・ポーチュラカが満開になり、コミセンに来る人の目を楽しませています。

又、同時に自治会・町内会に植えた花々が咲きそろう、車で通ると一瞬の心のやすらぎになつていきます。

小合地区は「花の小合」として、花卉園芸で栄えてきており、花を極め生産し、販売して地域の活性化に寄与してきました。

チューリップ発祥の地として、オランダより球根を輸入し、生産技術を普及してきた子成場の小田喜平太（一八八六一一九五五）は、全国的にも名は知られ、郷土の誇りでもあります。昭和30年代の頃は、信濃川の堤外地の畑には、毎年春になると色とりどりのチューリップが咲き

そろう、チューリップ祭りも盛大に行われていました。畑全体が花の絨毯のようで、多くの人が訪れて賑わっていました。

その後、牡丹・芍薬・さつき・石楠花・ボケ・アザレア・クリスマスローズと多くの先人達が

極め、生産し小合の花を守り育ててきたことは、素晴らしい偉業であります。

今は、花夢里・フラワーランド等が出来、流通の活性化が図られています。そこに行けば色々の花と出会うことができます。

しかし、現在の「花の小合」としての現状はどうでしょうか。温室の中で生産された花は、種類も多く「花の小合」として十分自慢もできますが、小合地区の中で、花ロードや花を愛でる公園が少なく、「花の小合」としてのイメージが少ないという話も聞きます。

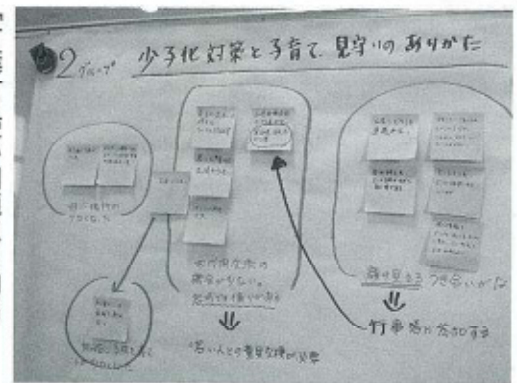
確かに、商品としての花は、種類も多きいんな面で活性化されていることは、喜ばしく誇りに思いますが、花の小合として、いろいろ所に花を植えイメー

ジアップを図ることも、大事なことでないかと思えます。

毎年、秋葉区の事業で、花の苗を6月に希望する団体に配布され

ます。今年も、多くの自治会・町内会、コミ協も賛同し植えることが出来ました。これらを活用し、より多くの自治会・町内会も参加していただきたいと思います。

又、コミ協といえども、昨年秋には春に咲く花チューリップの球根を自治会・町内会、コミセンに植え、地域の中で見事な花を咲かせました。今年度は秋に咲く花「コルチカム」の球根を先日植えました。秋には地域で花の咲くのを楽しみにしています。

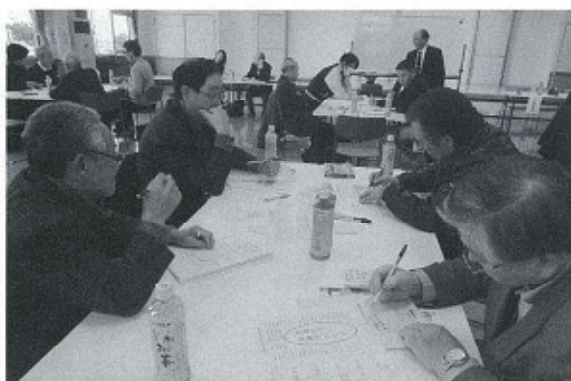


「付箋」を使い問題点を抽出

このように、四季折々の花が、絶えることなく咲くような計画をしています。ぜひ多くの自治会・町内会の参加をお願いいたします。

花を植えることは簡単だが、その後の水くれ、除草がとても大変なことです。皆で協力し、小合地区に入ったら、花で潤う地域になるよう、皆さんと一緒に活動していきたいと思っております。

どうぞ「花の小合」として、花いっぱい運動にご協力をお願いいたします。(田村)



一卓五人程で分散して、グループ討議に入る

なぜ「協働」が必要なのか

人々の生活構造や価値観の多様化、急激な人口減少、少子高齢化の進行など社会が大きく変化複雑化する中で公共的課題は多様化し、法律や予算に基づいて公平・公正・均一的なサービスを提供する行政だけでは市民のニーズに十分対応が困難な状況になっている。

一方で、市民の社会参加の意欲の高まりの中で公益・非営利の分野で自主的・自発的な市民活動が活発になっている。

こうした社会の変化の中、市民に直接的なかかわりになる行政サービスにおいては市民自治の多様な担い手と協働して、その専門性や受難性、機動性などの特性を生かすことで、より市民のニーズに沿ったサービスの提供が可能となる。

また、協働による取り組みを通じて、市民自治の多様な担い手や市、それぞれの考え、仕事の進め方の違いなどが分かりお互いの組織の活動の活性化が図られる。

〈協働の概念〉

協働とは、一般的にコラボ

レーション、パートナーシップと英語表記される。「共に働く」という意味です。協働の概念は、米国のインディアナ大学の政治学教授ヴィンセント・オストロムが1977年の著書の中で「Co-production」という造語を用いたことで産まれてくる。8は「共同の、共通の」という意味をなし、これに「作り出すこと、生産・製造」と結合されて生まれたものであり、これが「協働」と訳されたことで日本語として定着して来たといわれている。(出典：平成27年7月新潟市協働の指針)

年	世帯数	男	女	人口
20	1,115	2,051	2,133	4,184
21	1,118	2,038	2,095	4,133
22	1,151	2,001	2,095	4,096
23	1,154	1,999	2,090	4,089
24	1,173	1,975	2,085	4,060
25	1,188	1,951	2,060	4,011
26	1,208	1,928	2,035	3,963
27	1,217	1,877	1,993	3,870
28	1,229	1,873	1,985	3,858
29	1,230	1,855	1,970	3,825

10年の小合の人口推移

(合併 平成17年3月)

出典：新潟市ホームページ

少子化対策と子育て、見守りのありかた

地域懇談会では、子育て中の世代、また子供のいる世帯の方から気軽に子育ての悩みを相談できる場や設備の充実した公園などの施設が地域内にあつてほしいとの意見や、コミセンを活用して「婚活」や出会いの場を提案できないかといった意見が出された。

小合地域において少子高齢化の現状は大きな課題であると思ふが、地域全体の雰囲気としてあまり危機感をもって受け止められていないようにも思ふ。高齢化は確かに進んではいるが概ね元気で達者な高齢者が多い。子供の数も少ないとはいへここ何年かは現状維持ないし横ばいで推移していて、その少なさをゆえに小中学校では先生方が本当にきめ細かく一人一人に目の届いた指導をしている。都市部の大規模校では望めないことである。

未就学児の子育て環境については、子供と祖父母との同居の世帯が多い小合地域においては昨今言われているような待機児童の発生などは現在ないように思ふ。

思ふ。

しかし、祖父母世代もまだまだ仕事では現役といった世帯も多く、仕事をしながら孫の見守りもお願いするというのは親世代にとっても心苦しいのではないかと。地域内には幼稚園・保育園・学童保育がそれぞれ一つずつあり、受け入れ定員も適正であるように思ふ。そこに通常の保育に加えて夏休みや冬休みなどの長期の休みの期間に限り、短時間でも低学年の子供を預かってもらえるようなしくみがあれば、親世代の負担感もかなり少なくなるのではないかと思ふ。

夏休みや平日の振替休業日などに各自自治会等の公会堂や集落センター、コミセンを開放し、経験豊富な町内の先輩の方々に子供たちの見守りをお願いすることはできないだろうか。そこで生まれる繋がりはそれぞれの自治会等において新しい見守りの目を増やすことにもなるのではないかと思ふ。(加藤)



安心・安全を支えるコミ協・自治会等の組織について

自治会・町内会(以下「自治会等」)の歴史は古い。秀吉の「刀狩り」を実施した。そして治安の目的で五人組十人組の掟を定めたころより史料にある。

江戸時代では隠れキリシタンの制圧や犯罪防止。さらに捨て子など福祉分野もやっていたようである。

時代が進むと年貢米や治安維持が強化され五人で一組とする制度に変化する。内容は最寄りのもので構成された。所謂、地縁団体である。農作業・防火・防災犯罪発生時の連帯責任を負うというものであった。それが今日まで残っている。日本の治安が世界的に見て優秀とみられるのはこのことと言われている。

明治時代は西洋資本主義に追いつけという政策が優先され、地方の整備をはかる組織として活用される。いずれも時の権力の手足となり組織されてきた。そのことは、近代に入り太平洋戦争の敗戦で「GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)」により解体されたことが証明している。

しかしながら制度としては廃止されたが、任意の団体として存続する。そして強制力は持た

ないが全加入を前提とした団体として今日に至る。

少子高齢化社会を迎え、地域社会づくりで「自治」を考えると、その最小単位の「自治会等」を抜きにしては考えられない。

小合地域コミュニティ協議会(以下「コミ協」)は結成して20年を迎えます。新潟市「コミュニティ・コミュニティハウス」条例により、中学校区ごとにコミュニティセンターが作られた。その運営主体の団体が地区コミュニティ協議会である。

「コミ協」と「自治会等」は地域の共通の目標に向かって「協働」で活動する。例えば敬老会・自主防災訓練などがある。

「自治会等」は足元のことをよく見る。(虫の目)「コミ協」は地域全体を俯瞰して課題の整理をして地域社会を作る(鳥の目)地域の中では民生委員やPTAなど様々な団体が動いている。その軸となるのが「コミ協」であり「自治会等」である。秋葉区においてはまだ血縁関係が強い「自治会等」では結束が保たれているが、都市部では加入率は低く役員のなりてはいいないなど組織の体をなしていないところもあるという。役員の短期交代などが進んでいるが最低でも4年位

が地域にも自治会長にもプラス面が出るのではないか。

重要なことはこれらが縦糸・横糸の構造でしかも有機的に連携して地域活性化の。ペスタリアンサー。(模範回答)を導きだす努力をみんまですることである。(阿部)



視覚化した課題を整理して発表

地域振興に対する取り組みについて

私達の郷土は、「花の小合・チューリップ発祥の地」であります。今日の「花の小合」は長尾次太郎(一八六八―一九三〇)をはじめ多くの先人達の未来を見据えた本当に多くの取り組みと大変な苦勞で築き上げて来たものだと思えます。しかし、今はどうでしょうか。チューリップと

言えば近隣の五泉や中条が思い浮かびます。

私は、今日までの経過や商業としての観点は何もわかりませんが、残念で少し悔しさを感ずるのは私だけではないと思われ

ます。平成28年度に開催された地域懇談会においては現在の小合地域について様々な意見や要望が出されました。その意見は、①花の小合の特産品、特に花を地元小合はもとより近隣の皆さんにもっとアピールしてほしい。②アピールする為の環境と場所を作ってほしい。その実現に向けて具体的には現行の施設とも連携し子供達や高齢者が特産品、特に花の素晴らしさに直接ふれあう事ができて、そしてピクニック感覚で集える環境を作ってほしい。そして食堂や喫茶店を作り交流の場を作ってほしいなど「花の小合」についての意見が出されました。

「花の小合・チューリップ発祥の地小合」をもう一度取り戻したいという強い気持ちの表れだと思えます。そのためには小合の園芸に携わる皆様と一歩を踏み出すために様々な形での意見交換が必要だと思えます。

住民の足の確保について

高齢化は更に進み、前年度の地域懇談会、そして今年7月に開催された秋葉区の地区懇談会においても切実な要望が出されました。住民の足たる公共交通も今は特に高齢者にとっては不便な状況となっています。前述したように花の素晴らしさを感じるこの出来るピクニック広場の実現がシャトルバスの運行につながって行くのではないのでしょうか。このことが住民の足の実現の展望が見えてくるのではないのでしょうか。心を一つにして実現に向けて進めていきたいと思います。(稲月)

◆編集後記◆

初のワークショップ方式の地域懇談会でした。

発言やまとめ方もうまく処理できたと思えます。四つのテーマを基本に今後も討論を深めて行きたいと思えます。小合の諸兄弟の豊かな人生経験とその技術を出し合い地域の活性化をめざします。